
不思議の最終紀行

フラミンゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議の最終紀行

【Nコード】

N1277W

【作者名】

フラミンゴ

【あらすじ】

「来たれ時のさざ波、真実の運命を闇の腕から呼び覚ませ」――
――修学旅行の夜、いきなり見知らぬ森に放り出された少女は死に際のドラゴンに出会う。――運命が歪められた世界で、少女が自ら選んだ選択の話。

宮の最終紀行

何故、何故、何故。

少女は何度も自分に問う。

日頃の行い、態度、勤勉さ。そのどれもここへ来てしまった理由に
思えるし、同時に的外れである気もした。

そもそも、そんな事を考えても意味は無い事は判っているのだが、
他にどうする事も出来ずに覚束ない足取りで人里を目指しつつ、も
う何十回とした自問自答をまた繰り返し返す。

何故。

始まりは唐突だった。

高校二年生、修学旅行の夜。女子高生小此木^{おこのぎ} 宮^{みや}は、トイレに行く
ためにクラスメイトが寝ている大部屋を出た。

“EXIT”の文字が微かに光る緑色の明かりの中、薄暗い宿屋の
廊下を歩く。部屋にあるトイレは昼間友人達が下らない理由で詰ま
らせてしまったので、現在使えなくなっていた。そんなわけで、宮
は部屋から少し離れた所にあるトイレに向かったのだ。

こういう時、大抵の少女ならば友達を起こして一緒に付いてきても
らったりするものだが、宮は違う。

宮とて、夜の薄暗い廊下は気味が悪いと思うが、しかし彼女は幽霊の存在を信じていなかった。空想上のキャラクター、映画やテレビを見れば怖いが、いないものは恐がり様が無い。

それ故、丑三つ時の薄暗い廊下に一人きりという状況を気味が悪いとは思ひこそすれ、恐ろしいとは思わなかった。

トイレに着き、用を足して外に出る。タイル地の床がスリッパで歩く度にかつかつと鳴った。

ふと、宮はタイルの一枚が剥がれて下のセメントが見えてしまっている場所に気が付いた。

（なんて事は無い、誰かが割ったか何かしたんだ、きっと）

一瞬ちらりと見ただけで、宮は視線を外し手を洗おうと蛇口のコックを捻る。しかし宮が目を離れた一瞬後、タイルがめりめりと音を出して剥がれだしたのだ。

宙に浮くタイルに目を見張る宮。口を開けて呆然とする。蛇口からは水が出っぱなしだ。

やがて宮の足下のタイルも剥がれて、現われたのはしかし、セメントではなく土の地面だった。

「……うえ、ええ？」

しまいには床のタイルだけではなく、壁までも剥がれて始めた。それはもう豪快に、タイルだけとは言わず壁板からぱりぱりと。

全て無くなった後、そこは修学旅行に來た場所ではなく、見知らぬ森の中になっていた。

そうして、話しは冒頭部分に戻る。

今現在、あれから既に三日が経っていた。

一日目はその場で動かずに大人しく救助を待っていた宮だが、待てども暮らせども人は来ない。喉が渇き、空腹になり、やっと二日目に人を探し始めたのだ。

「ああ、神様どうしてこんな事をなさるんですか。試練ですか、私がおかしかったか。したのかも、なんかしちゃったのかも私い……」

大分長い時間歩いたせいで、疲労困憊のため倒れる様にその場に座り込んだ宮は小さく独り言を呟く。

死ぬのかもしれない、と宮は思った。もしくは、もう既に死んでいてここは死後の世界なのかも、と。

何故なら、タイルが誰の手にも触れずに浮き上がったり、壁がばりばり剥がれだすのは宮の知る限り常識の範疇外だからだ。

宮は、自分は死ぬまで常識の範疇の中で、どんなに願ったって不思議な素敵な事なんて起こらずに過ごすのだと思っていたので、今の事態は宮の中で生きてる内に入らない。

（生きた心地がしないとはこういう事なのかもしれない。いや、ちよっと違うかも）

そんなふうには現実逃避を試みるも、宮としてこれが夢でも幻でもま
してや死後の世界だなんて、本気で思っていないやしない。少なくとも
三日間飲まず食わずで歩き続けた宮はまだまだかつて無い程に空腹な
のだ。その感覚が夢であろうはずが無い。

座り込んだまま、もう立つ気力の無い宮は目に映る草が食べられる
かを吟味し始めた。

その時、遠くの方から宮の耳に大地を震動させる程の叫び声の様な
ものが届く。クォーン、クォーンと、聞いていると痛みと悲しみが
伝わってくる叫びだ。

宮は切なさで心臓が潰れそうで胸を押さえた。

「なに？」

宮の問いに答えは返って来ない。ただ、暗い静かな森を叫び声がこ
だます。

「なんなんだよ、誰？」

知らず知らず、宮の頬に涙が伝う。叫び声は宮を呼んでいる様でも
あった。

□
□
□

「どうじゃ、エドは巧くやったかの」

「はい、その様で。あらかた終わりましたそうです。もうこれ以上
は探しても無駄かと」

「そうかえ」

「国民の動揺も少ないでしょう」

「それは上々」

誰が見ても最高級と判る調度品の数々が置かれた部屋に、窓から射し込まれる月明かりが二つの影を浮かび上がらせる。一つは腰の曲がった老婆のもので、もう一つは妙齡の美しい、それこそ月の化身かと見紛う程に美しい女の影だった。

女が熟れた林檎の様に赤い唇を開く。

「奴らに遅れを取るで無いぞ」

「は」

老婆は折れた腰を更に深く折り女に礼をとると、霞の様に掻き消えた。老婆の影もまた、同じ様に闇に消える。

「さあ、奴らはどう出るか」

□
□
□

声に誘われて、正しくは行くあてもなく彷徨うよりはましかと宮が向かった先で見たものは、十七年間宮が培ってきた語録ではとても表現出来ない程壮絶な光景だった。

クオオオオオオン

近づいた事によって先程よりも間近に聞こえる叫びが、宮の鼓膜を破れそうな程震わせる。宮の膝も震えていた。

叫び声の主は、普段の宮ならば想像上のモンスターだと一蹴する巨大なドラゴンだった。

金色の鱗はドラゴンが動く度にがらがらと音をたて、心なしか弱々しい呼吸もその都度大きな口から炎が漏れている。

紛れもなくドラゴンだった。

宮は己の目を疑う。恐怖より驚愕で声が出なかった。

（私、やっぱり死んでたのかな）

少なくとも今にも死にそうではある宮は、気絶しそうになりながら後退を始める。幸いドラゴンはこちらに気付いていなかった。

ぱちん

宮が踵で小枝を踏むまでは。

繊細そうな董色の瞳が宮を捕える。その瞳に見据えられて、動ける者などこの世にいない様に思えた。

——何故ヒトの小娘がここにいる。

ぶふぁー、と僅かに火の粉を舞散らせながら荒い鼻息が宮の体を打った。宮は間近に迫るドラゴンの鼻面に、震える足を動かす事も出来ずにただ顔を背ける。

「あ、あ、ああのおお」

——ヒトの言葉はいつからか我らにも理解不能になった様だな。

喋り掛けられた事に気が付き、言葉のやり取りが可能だと判った宮はどうにか自分を殺さないで欲しいと、その旨をドラゴンに伝えようとした。しかし、舌がもつれて上手く喋れなかった上に声が裏返って変な抑揚になってしまう。

結果、ドラゴンには宮の言葉が伝わらなかった様だ。しかし、泣きそうになりながらも宮は今度こそ、と腹に力を入れる。

「あの！こんな事を提案するのはあれですが！もしあなたが今究極にお腹が減っているわけで無いのなら、私を食べないで欲しいのですが！」

宮の提案にドラゴンは、僅かばかりその葦色の双眸を驚いた様に見開く。

——なんだ、言葉は通じるのか。ならば始めから通じる言葉を喋れば良いものを。

「ごめんなさい！」

——うるさい、私の鼻先で叫ぶな。

「すみませんでしたああ！」

宮の再びの謝罪はドラゴンの気に召さなかったらしく、炎混じりの溜息を宮に浴びせ掛けた。

——…もう良い。我は既に揺り籠の環を外れておる、食事はせん。

「な、な、なぶり殺したりは……？」

——趣味で無い。

「そうですか……」

よく判らない単語をドラゴンが言った事も宮にしてみれば気になるし、ドラゴンの言葉を聞いても宮はまだ完全には安心する事は出来なかったけれど、取り敢えず相槌を打っておいた。

——して、何故ここへ？人間は我の決めた境界の中には入って来れない筈だが。

「きよ、境界……？あの、私迷ってしまったみたいで」

——成る程、迷い込みとな。どこかに綻びがあったのかもしれない。そこを探せば外に出られるだろう。

「外に？もとの場所に戻るの……？」

宮はそれを聞いてほっとした。気が抜けたのと、三日間飲まず食わずなのも相まって膝から力が抜けて座り込んでしまう。宮が思っていたより宮の体は疲れ、水と食料を欲していた。

「良かった……」

——そなたはまことに運が良い。いかな我とはいえ、そなたの存

在を知らなければどうする事も出来ないからな。

「そ、そうですか」

ドラゴンがあまりに気安く話し掛けてくるので、宮は恐る恐る会話に興じる。

まるで、狂暴な犬の頭を撫でている様だな、と宮は思った。撫でさせてもらっているうちは良いものの、きっと少しでも機嫌を損ねれば噛み付かれる。

「叫び声が聞こえて、それで来てみたんです。でも、帰れるなんて……本当に良かった」

思わず笑みの零れた宮だがすぐに目の前のドラゴンの様子がおかしい事に気が付く。

——叫び声、だと？

琥珀色の瞳が今までの比でなくくらいに見開かれ、ぎょろりとしたその虹彩の真中で瞳孔がこれ以上無く細くなる。

——叫び声が聞こえた。そなた今そう言ったな。

「は、はいっ言いました！」

木とドラゴンの鼻先に挟まれて、宮は事態の急変に焦りながら叫んだ。

——……なんて事だ、こんな小娘が我の揺り籠だと？

「ゆ、揺り籠……って」

——我が最後がこの小娘だと？　どういう事だ！

眇られたドラゴンの瞳からは怒りと苛立ちと悲しみが見て取れる。
何かに酷く憤っている様だった。

宮は攻められる様な口調で問われ閉口する。宮としては、このまま黙ったまま何も話さずにいたかった。何がドラゴンの気に障ってしまったのかさっぱり判らないのだ。口を開けばまた、まさしく竜の逆鱗に触れかねない。

——……あは、あはははは！　そうか、環の主はこの我すらも、環から外れればただの血と肉だと言うのか！　そう言いたいのか！

「わ、判らない。私、何も、知りません」

怒れるドラゴンは激情のままにその太く長い、鱗の並んだ尻尾で大地を叩く。その度、宮は地面が揺れる程の衝撃に堪え切れず悲鳴を漏らした。次は自分がその草木の様に潰されるのでは、と。

「止めて！　助けて下さい！　殺さないって言ってたでしょう！？」

——殺しはしないさ、人間の娘よ。しかし、帰すわけにはいかなかった。

「な、なにそれ！　どういう事！？……っひ！」

いきなり気の変わったドラゴンに宮は思わず噛み付くが、一睨みさ

れて凍り付く。

——そなたが我の揺り籠だというのは、我が血肉、一滴一粒残さず食い付くしてもらわねばならないなあ！

ドラゴンの言葉に、宮は瞠目する。言っている意味が全くさっぱり理解できない。

「な、なにを……言って」

高く、高く、宮をこの場に呼び寄せた声で、ドラゴンは吠えた。さながら、宮がここに來た事を歓迎する様に。悲しむ様に。

宮が森に放り出されて六日が経っていた。宮は六日間何も食べずに、ドラゴンの棲む洞窟と思しき場所に閉じ込められていた。暗い洞窟の中には水が滴っていて、時々倒れる様にして地面に横たわっている宮の肩を濡らす。光が全く無く、宮はもう、自分が目を開いているのか閉じているのか判らなくなってしまった。

「お母さん……」

宮の口から、擦れた声が落ちた。今日初めて喋った言葉だった。思い返せば、昨日も喋っていない事に宮は気付く。

もう何が何だかわけが判らなくて、宮はこれが夢なんじゃないかと思う。きっと、修学旅行の夜に疲れて眠りこけてそのままなのだ、と。ここで死ねば、本当の世界の自分が目を覚ますんじゃないかと夢想して、しかし、宮は確実に衰弱していく自分が恐ろしく、死に切れずにいた。

「お、お母さん……っ」

何度も母親を呼んで、助けを求める。だが、当然ながら母親の助けが来る事もましてや宮が夢から目覚める事もなかった。だってこれは現実なのだから。

その時、宮から少し離れた場所で眠っていたドラゴンが目を開いた。

——喋るのを止めるな。我はそなたの声を好いている。

最初に会った時よりも弱々しい息を吐く様な声だ。

宮は一瞬、こんな風に自分を閉じ込めた奴が弱々しく何かを頼むなんて、と怒りを感じたが、宮の体のどこを探しても、怒鳴る力なんてもう残っていなかった。

「…話す事、なんて、無い」

———なにか、なんでも良い。音が無いのが恐いのだ。

「意味が判らないよ。私を帰して」

それは出来ない、と言うように、ドラゴンはどう何度目かになる要求に首を振る。

———我は大分長く生きてきた。ざっと数えて五千年くらいか。いつか死ぬ事は判っていたが、同時にいつまでも同じ明日が来ると信じてもいた。酷い怠慢だと、今では判る。

いきなり語りだした懺悔の様な言葉に、宮は困惑した。しかし、そんな宮の心情は置いてきぼりにしたまま、ドラゴンの独白は続く。

———我は何もしなかった。ただここにいただけだった。きっと、なんの価値も無い生だった。それが我の怠慢だ。しかし、それすら失われると思うと、足掻き足りない気がしてくるものだな。

独白が不意に途切れる。宮は、こんなに大きくて美しく、強い生き物もそんな事で悩むのか、と驚いた。

「自分が生きてきた意味なんて、考えるだけ無駄ですよ。自分に判らないなら、きっと他の誰かが判ってくれてるって思うしかないでしょう。そもそも、そんな事、私は今まで考えた事無い。私に言わないでよ」

——他の誰か、か。

「というか、なんでそんな死ぬ死ぬ言ってるんですか。どっか身体でも悪いの？」

ずっと聞きそこなっていた宮の疑問の一つだ。聞きたい事はまだ多々あるが、宮はこの事が今気になっている。それが、自分がここに殺されずに捕まえられている理由ではないかと、宮は思っていた。

——そうではない。我はもう揺り籠の環から外されてしまった。食べ物が食べられなければ、死ぬしかない。

「揺り籠の環？ ってなんなんですか。私、知らない」

——世界の常識も知らないとは、頭の悪い小娘だ。何故、こんな奴が我の……。いや、言っても仕方あるまい。

「はあ……」

溜め息を吐くドラゴンに、宮は気の無い声を出す。それが、さらにドラゴンの気に障ったようだった。

——己が侮辱されたというのに、なんなんだその気が抜けた態度は。

「いや、実際気が抜けてるんで。会話するのも、辛い」

——— 気力がどうであろうと、自分のプライドが傷付けられたのだぞ。憤らずにどうする。

プライド、とドラゴンが言ったのを聞いて、宮は猛烈な違和感に襲われる。今まで古めかしい言葉で喋っていたので、急にドラゴンが英語を喋ったのは、宮にとってちぐはぐな感じがした。

「そんな事、どうでも良い。だってもうすぐ私、死にますから」

——— 六日食べないくらいでは死なん。

ドラゴンのその言葉に、身体中のどこを探しても見つからないと思っていた力が湧いてきた。怒りだった。

「六日だけじゃない、あんたがいる限り私はここから出られないんでしょ！なのに、なんなの他人事みたいに！もう帰してよ、私をここから出せ！ふざけんな！」

日にちなんて、宮には関係なかった。仮にここで死ななかったとしても、今宮の感じる死ぬんじゃないかという恐怖は現実のものなのだから。死ぬ死はないの話ではない、宮は自分がこんな思いをしている事に憤っていた。

わんわんと、洞窟内に宮の怒声がこだまする。ふざけんな、な、な、と反響する声に宮は苛立って眉を寄せた。

——— そう喚くな、もう今日限りだ。

思わず怒鳴った宮にドラゴンが静かに返した。疲れてしまったかのように、今はその瞳を閉じている。宮は、ドラゴンが今日限りだと言った言葉の意味を聞きたかった。また騙されているのかもしれないと思いつつも、宮は元いた場所へ帰れるかもしれないという希望を捨てきれない。

「ねえ、今日限りってどういう事」

けだるげにドラゴンが立ち上がる。立ち上がったドラゴンには洞窟は少し狭いのではないかと、宮は思った。ドラゴンの背筋に連なつて立つ、剣の様に鋭い鱗が洞窟の天井を削っている。ドラゴンの顔の位置が高過ぎて、寝そべっている宮は首を反らさなければならぬ。叫んだ拍子に零れた涙が、首を伝って宮の胸元に落ちた。

———今宵、我は死ぬ。そして再び揺り籠の環の一部になるのだ。愚かなるお前に、揺り籠の環とはいかなるものか教えてやろう。

ドラゴンが話したのは幻想物語だった。生きとし生けるものの達の行く末を語る話。

金色の鱗、堇色の瞳をしたドラゴンかくかたりき。

太古の昔、生命の始祖が産まれた時には既に、この世界に神様はいなかった。神様がいない理由も経緯も判らないが、ただ、最初に産まれた彼に、産んだ者がいない事だけは確かだった。

その時の世界は、青い空と白い大地がただ続くだけの場所だ。そんな場所で一人きりなのを寂しがった彼は、吐息から恋人を作ったのだった。同じ景色ばかりで恋人が退屈するといけなさと、退屈を紛らわす為に飲み込んだ土から木々を作った。

やがて恋人が死に、地に横たわった時、どこからともなく狐がやって来て恋人の屍肉を食らう。怒った彼は狐に矢を向けつつ、何故そんな事をするのか聞いた。賢い狐は殺されるのが嫌なので、彼を励ます様な言葉を言った。

おお、おかわいそうに旦那様。けれども私が貴方の恋人の屍肉を食べたとして、彼女が消えてなくなるわけではありません。彼女は私の中で、私の一部として眠り続けるのです。そう、謂わば私は彼女の揺り籠。彼女はここにいますですよ。

その話を聞いた彼はいたく納得し、狐に礼を述べた。そして、命あるもの達に教えたのだ、死せるもの達は生けるもの達の揺り籠で眠るのだ。揺り籠の相手を決めるのは運命である。しかし、時に運命こそが相応しい未来を連れて来るのだ、と。

そして、揺り籠だったものがいずれ、揺り籠で眠る時が来る。そうして命は繋がっていくのだ。そして、いつか全てが繋がった時、我々の命は一つになる。環の様に。

彼——揺り籠の環の主はそう言った。

□□□

語り終えたドラゴンは、苦し気に溜め息を吐くと、重々しく話し始める。学校長挨拶みたいだな、と宮は思った。

——我にもとうとう、揺り籠で眠る時が来たのだ。

「でもさ、あんたさ、最初に会った時に揺り籠の環？って奴から放れちゃったって言ってましたよね」

投げやりに宮が訊ねる。ドラゴンが話した事意味が全く判らずに、困惑している様子だった。

——そう、我は一度ものを食べられなくなった。揺り籠になれない我は一度揺り籠の環から外れる。しかし、それ故に死に行く我は、揺り籠で眠るのだ。

「揺り籠……。て、え？私があんたの揺り籠って事は、私があんたを食べなきゃいけないって事！？」

——頭の悪い小娘だな。だから最初からそう言っておろうに。

「き、聞いてない聞いてない！ていうか、ドラゴンの肉とかごめんなんですけど！」

ありえないわ！と叫ぶ宮を、しかしドラゴンは非情にも威嚇して黙らせる。

——我とてまだ死にたくはない。しかしそれが運命なのだ。そうせねば、我は環の主から見放されて二度とこの世界に生まれてこれなくなる。そのような非情な事、優しいそなたはせぬだろう？

そう言って、同情を受けるために弱々しい声を出すドラゴンに宮は顔を顰めた。

言いなりになんかなるもんか、と宮は思った。こんな酷い仕打ちをしておいて今更同情で自分をどうかしようなどと、宮には到底許せる事では無い。

（食べると頷いて、その約束を守らなければ良い。このドラゴンには私が真実約束を守るかどうか、確認する術など無いのだから！）腹の中でほくそ笑みながら、宮は顔を仰向けてドラゴンと目を会わす。そして神妙な顔をしてドラゴンの希望を叶える旨を話した。

——そうか、有難い。些かの不安は残るものの……、そうだ、そなた名は？

「み、宮だけど……」

——ミヤ、そなたは我が死んだ後、屍肉を食べてくれるな？

「え、うん」

肯定の言葉を吐いた途端、宮は頭蓋骨から背骨を伝って電撃の様な衝撃が落ちるのを感じる。

「ぎゃあっ」

思わず叫んだ宮はその場に力無く倒れた。瞠目するも、あまりの衝撃に身体が動かせないのだ。

「い…ま、私に、何したのっ」

——なに、大した事ではない。そなたが約束を違えぬように魔法を掛けただけだ。

ドラゴンの言葉を聞いて、宮は愕然とした。魔法とはいったい何の事か、宮には碌に理解出来ない。それよりも、今ドラゴンが言ったのはどういう事なのか。約束を違えぬように、と言わなかったか？宮はそこまで考えて血の気が引く。

「魔法！そんなものが有るわけない。冗談でしょ？」

——冗談などではない。我は今最後の力でそなたに魔法を掛けた。我が死ねば発動する魔法だ。

そう言うドラゴンが先程の魔法とやらを使ったせいで今にも死にそうなのは、宮の目からも明らかだ。

まさか、と思いつつも宮を恐怖が襲う。まさか魔法など有るはずが無いと思っていた。しかし、身体が受けた衝撃は確かだし、ドラゴンが言っているのだから有るのも当然だと思え無くもない。

「う、嘘」

——頼んだ。

そう言ったきり目を瞑って力無くうなだれたドラゴンを見て、宮はとうとう切羽詰まってくる。

最初こそ反骨精神からの思いつきだったが、事態が迫ってくると宮としてもなんとか逃れたい気持ちもたげてきた。なんといっても、先程まで同じ言語で会話していた相手を食べなければいけないわけだ。だというのに、打開策は何も思い付かない。焼いても良いのかしら、なんて現実逃避まで頭に浮かぶ始末だ。

——そうだ、言い忘れていた。ミヤよ。

「は、はい！」

——全部食えとは言わん。多いだろうからな。

「……どうも」

なにそれ別にどうでも良い！宮は思ったが口にはしない。

焦りに焦って恐慌状態に陥り掛けた宮に、とうとうその時がやってきた。

5 (前書き)

描写は無いですが、少々血生臭いです。気を付けて下さい。

暫く硬い岩の上に寝そべっていたドラゴンだが、急に何と無しにと
いった風に起き上がった。そして出口へと大きな身体を引き摺る様
に歩いていく。宮は戸惑ったが、ドラゴンが視線で外を示すので付
いて行った。

「どこへ行くの」

訊ねるが、ドラゴンは一言も言葉を返さない。

やがて暗い洞窟の中から外へと出た。宮にしてみれば三日ぶりの外
の空気だ。冷たい空気が目に痛くて、少し涙が浮かぶ。

外は夜だった。見たことないくらい近くに満月が浮かぶ光景に、宮
は暫し見とれる。

「ねえ、どうしたの」

宮は問うが相変わらず返事は返ってこない。ドラゴンはただ喉を反
らして夜空を見上げ、浅く目を閉じていた。宮はその様子をじっと
眺める。やがて、大きく息を吐いたドラゴンが宮を見た。

宮の目には、一連の動作にはなにか、未練を振り切るかの様な感情
が垣間見えた。

——時が来た。

だから、ドラゴンがそう言った言葉の意味を宮は正しく受け取って背筋を凍らせたのだ。

「時って、まさか…」

——私は運命の揺り籠に帰る。その後はミヤよ、頼んだ通りにな。

無理！

宮は叫びたかった。しかし叫べなかった。威嚇するでもなく堇色の瞳が宮は見つめていたからだ。圧力や訴えを感じたわけではないが、その瞳があまりに静かで宮は齒軋りをした。

（早すぎる。話を聞いたばかりなのに。覚悟を決める時間くらい頂戴よ！）

たとえば、事前に懇切丁寧に説明されていたとしても宮は直前になって焦っただろうが、それは今どうでもいい事だ。ただ、今の宮には得体の知れない生き物の生肉を食べる覚悟が無かった。

再び上を向いたドラゴンは、宮がドラゴンに会った時の様にあの悲しい鳴き声を上げる。間近で聞くそれは宮の身体の芯を激しく揺らした。比喩表現ではない。あまりの声の大きさに、実際宮は身体が震えた。

細く細く、惜しむ様に最後まで声を伸ばすと、ドラゴンはその巨体を傾ける。堇色の瞳が一瞬だけ宮を映したが、次の瞬間には轟音とともにその身を地に伏していた。

土煙の中、宮は呆然と立ち尽くす。自分がこれからどうするのか、

どうなるのか。もしかしたら魔法だなんて苦し紛れの嘘かもしれない、そんな事を考える。

しかし、次第に開けてきた視界にドラゴンの身体を捕えると宮の背中に電撃が走った。胃がぎゅっと動くのを感じ、宮は怯える。頭を後ろから殴られたかの様な衝撃で、宮は気を失った。

□□□

生温い鉄の味が口を満たしている。宮は血塗れの両手を見て、我に返って後退った。

「わ、あ…」

胃が満ちて、苦しい程に感じていた空腹はどこへやら消え去っていた。宮が気を失っていた間、宮はドラゴンを食っていたのだ。

魔法とはこういう事なのか、と宮は関心する様な呆然とする様な気持ちで考えた。放心状態である。

目の奥がぐるぐるとして、今にも腹に詰めた肉を吐き出してしまいそうだった。込み上げてくる酸っぱいものを必死で抑える。

「ちくしょう、最悪…」

まふまふドラゴンの望む通りになってしまい、宮は怒りを覚えた。しかし、ふと我に返って考える。ドラゴンを生で食べてしまった自分は、世間でどんな扱いを受けるのだろうかという事だった。

そもそも、ドラゴンとは人間に認識されている生き物なのだろうか

？少なくとも宮は聞いた事も見た事も無い。そんな生き物を本意ではないとはいえ食べてしまった宮は？

宮の頭はめくるめくネガティブスパイラルの中だ。

「あれ？これ、私はどうなるの？」

不安が宮の口から漏れる。今一番の宮の心配は、ドラゴンを食べってしまった事で警察に捕まったり、世間で冷たくされる事だった。しかし、それはすぐすげ代わる。

ワオーーーーー…

宮は本能的に見を硬くした。夜を駆る獣の鳴き声がすぐ近くで聞こえたからだ。そして、その時になって宮はようやくと自分の置かれた状況を正しく認識した。

即ち夜、人気の無い森で、血の臭いをさせてるだろう自分。それが、恰好の獲物になりえる事。

（食べられる）

ドラゴンを食べなければいけないと知った時よりも強く恐怖を感じた。逃げる為に宮は無残な姿を晒すドラゴンに背を向けて歩きだす。走らなかったのは、硬い場所で寝起きしていたせいか体の節々が痛んだからだ。

出来る限り早足で歩きながら、宮は長らく忘れていた疑問を思い出していた。一体ここはどこなのだろう、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1277w/>

不思議の最終紀行

2011年11月17日19時28分発行